

## タイ国における華僑社会の構造

——客家帮の場合(一)——

内 田 直 作

### 一 客家帮の歴史

バンコックにおける華僑社会の最高集成団体である泰国中華総商會に下屬する潮州・客属・広肇・海南・福建・江浙・台湾の七帮、いわゆる七属のうち、客属の客家帮だけは、地域的に限定されないユニークな人種集団を形成している。

**客家帮の出身地** 其他の各帮がその出身地が明確に地域的に限定されるのに対して、客家帮の場合は、その限定が困難であって、各地方への分散化が目立っている。

今、ここに客家の方言の客話を話す客家集団の本国における居住領域を明らかにすれば、次の通りである。<sup>(1)</sup>

タイ国における華僑社会の構造

タイ国における華僑社会の構造

省別	純客家県	客家混住県
江西	尋鄔 安遠 定南 竜南 虔南 信豊 南康 大庾	贛県 興国 零都 会昌 寧都 石城 瑞金 広昌
福建	寧化 長汀 上杭 武平 永定 将楽 沙県 南平	清流 連城 竜岩 帰化 平和 詔安
広東	梅県 興寧 五華 平遠 蕉嶺 大埔 和平 竜川	南雄 曲江 楽昌 乳源 連県 連山 陽山 恵陽
	紫金 連平 始興 英德 翁源 仁化 赤溪	海豊 陸豊 博羅 增城 竜門 宝安 東莞 花県
		清遠 仏岡 開平 中山 番禺 從化 揭陽 饒平
		信宜 徐聞 陽春 三水 防城 合浦 臨高 陵水
		欽県 広寧 恵来 儋県 定安 崖県 化県 澄邁
		万寧 潮陽 新豊 羅定 豊順 潮安 河源 封川
広西		武宜 馬平 柳城 藤県 桂平 平南 貴県 博白
湖南		鬱林 陸川 北流 賀県 象県 昭平 平楽 灌陽
四川		汝城 郴県 劉陽 平江
		涪陵 巴県 栄昌 隆昌 瀘県 新繁 内江 資中
		新都 広漢 成都 灌県
台湾		彰化 諸羅 鳳山

すなわち、純客住県三三県、非純客住（客家混住）県一〇六県、計七省、一三九県におよんでいる。だが、東南アジア地域に進出した客家幫を出身州県別に大別すれば、ほぼ次の通りになることが妥当である。

- (1) 永定客家（福建省永定県）
  - (2) 嘉应州客家（広東省嘉应州の梅・五華・蕉嶺・平遠・興寧の五県）
  - (3) 大埔客家（広東省潮州府大埔県）
  - (4) 惠州客家（広東省惠州府、惠州の海豊・陸豊の両県はいろほんの海陸豊客家をもふくむ）
- 東南アジア各地で客家の組織する主要な下位団体も、大体右の地域別で、永定会館、応和（嘉应州）会館、茶陽（大埔）会館、惠州会館、豊永大公司（福建省永定県、広東省潮州府大埔県と豊順県の三県）等が目立った存在であつて、それ以外の江西省・広西省・湖南省・四川省・台湾省方面からの進出は、ほとんどみないで、主として臨海の福建・広東両省に居住するものが国外に進出して、華僑社会の「客家幫」を編成しているといつて差支えない。

**客家の名称** 客家は前述のとおり、江西人でも、湖南人でも、福建人でも、広東人でもなく、きわめて移動性に富み、独自の習俗と言語をもつ人種集団であつて、それが客家と称せられるにいたつたのは、定着的な広府系が本地の Puntis と呼称されるのに対し、外省から移住してきた新来の「外客」との意味において、多少輕侮的な含意をもつて、客家 = the Hakkas, or the Khes と呼称されるにいたつたものとみられる。客語では、「the Khes」と発音されるが、広府語の発音による「the Hakkas」と客家自身も呼称する場合が多い。

**客家の南遷** 漢民族の歴史に一貫するものは、その「南遷」の傾向である。もちろん、例外的に山東省・河北

省等華北人が清末滿州族の旗地の今日の東北から、さらに国境をこえて、ロシア領の東シベリアへと北上した場合もみられるが、大勢は南遷の歴史で一貫している。

客家の南遷の経過については、客家出身の羅香林の著作「客家研究導論」（一九三三年出版）と、「客家史料匯篇」（香港、一九六五年出版）のうちに、もっとも精細にあとづけられている。それより先に出版された Ellsworth Huntington, *The Character of Races*, New York, 1925. のうちに、同一の論旨で、より簡略に明らかにされている。

両者とも、客家の源流は、黄河流域中部のいわゆる「中原」にあつて、北は山西省長治県一帯、西は河南省靈宝県一帯、東は安徽省淮南、南は湖北省の黃州、その中心は、河南省の予州とする「中原の居民」であつたとしている。

中原の漢族は、秦漢の頃から北辺の匈奴・東胡族等の騎馬諸民族の侵寇と、たびかさなる黄河の氾濫の自然的災害の影響からして、その南遷が開始され、本地、*the Punis* と称せられる先駆的集団が華南に定着していった。客家は本地と同じく中原の漢族であるが、その南遷の時期は、本地より一時期遅れて、東晋五胡の乱からその南遷の開始をみている。

今、羅香林の考証にもとづいてそれを要約すれば、客家の南遷は次の五つの時期に分けることができる。

第一時期（三一七—八七九）——東晋五胡の乱の影響をうけて、中原から湖北省・河南省の南部、安徽省・江西省と揚子江の南北兩岸に沿って江西省の贛江の上下流への移動

第二時期（八八〇—一二二六）——第一時期の旧居から、安徽省南部、江西省の東南部、福建省の西南部か

ら、広東省の北東の境界への移動

第三時期（一二二七—一六四四）——金人の南下と、宋の高宗の南渡（揚子江の渡江）の時期に、客家の一部は第二時期の旧居から広東省の東部と北部へ移動

第四時期（一六四五—一八六七）——明末清初の満州族の侵寇に際して、客家の先行した一部が、第二—三時期の旧居から、広東省の中部、四川省・広西省・湖南省・台湾から、貴州省・雲南省・西康省の会理まで移動し、さらに同時に東南アジアに向って進出した。

第五時期（一八六七以後）——同治年間（一八六二—一八七四）広東・広西事件、太平天国の乱（一八五〇—一八六四）の影響をうけて、客家の一部が広東省南路から海南島、さらに東南アジア各地へ移動

右の客家の南遷は、秦漢初期に先行した「本地」その他の人種集団とは一時期遅れ、華北における人災・天災に逐われる以外に、南下したときは、すでに先行の人種集団が、耕作地として恵まれた韓江・榕江・珠江下流のデルタ地帯を先取していたから、耕作に適しない「山多田少」の貧瘠の山岳地帯を開拓することを余儀なくされ、外来の第三者としての「客家」の名以外に、「山地」とも呼称された。

## 二 客家の特性

客家は前述のごとく、旧居における戦火、飢饉等から逐われる以外に、南下先では先住集団との間に土地をめぐる闘争が展開され、その経過において適者生存の自然淘汰をうけ、かつ山岳地帯の重労働からしても、男女ともとくに強壮な人種の集団を形成するところとなった。

### タイ国における華僑社会の構造

エール大学研究教授のエルズワース・ハンティントン＝Ellsworth Huntington が引用したところの、客家の中に生活し、中国国内を広く遍歴したスパイカー＝Mr. Spiker の言によれば、「客家は中国人の精華<sup>エッセンス</sup>である」とさえたえられている。<sup>(2)</sup>さらに、ハンティントンは、華北人には蒙古族、もしくは満州族の血統がまざっており、華南人には、マレイ系の血が混入しているようにも推測されるが、客家に関しては、民族的混合物というよりは、純粹な中国人の原型としてさえみられるとしている。

早期の蒙古的要素のまざりもなく、後期の海外からのヨーロッパ的影響をもうけない唯一の本物の中国人である<sup>(3)</sup>とさえ高く評価している。客家は清潔で毎日入浴し、女子に纏足の風習がなく、女子は尊敬されて自由を享受し、その地位が高く、かつ客家一般には教育がとくに普及していることを指摘している。<sup>(3)</sup>さらに、客家には刻苦耐劳と冒險進取の特性があり、男子は山多く田少くて生計に不足するため外地に出稼移民として離村し、山地の開拓は専ら女子労働によるものである。各村落の祠堂毎に常に小学校があり、公産の収入で免費教育が行われ、貧寒の子弟も平等に教育をうける道が開かれている。<sup>(4)</sup>

客家の言語については、南遷に遅れただけなお河南省方面の華北オリジンで北京官語＝Mandarin language の発音に近く、福建語、広東語とは別の言語系になっている。本地と客家の械斗による西路事件（一八五四―一八六七）に際しても、「仇客分声」がスローガンとさえたことが首肯される。このように、その言語・慣習からしても、広・福両系とは相違するユニークな人種集団を形成し、地域的に比較的限定されない客家帮の成立をみ、東南アジア諸国にも遍在をみている。

客家帮の政治的進出＝ハンティントンの客家の漢族精華説をそのまま受けいれることには問題があるが、客

家集団の中から清代後半以降、とくに政治面に多くの人材の輩出をみ、任侠の気風に富むことからしても、<sup>(5)</sup>と俗称される秘密結社の会党分子としても大きな役割を果たしている。以下、それらについて一瞥しておこう。

ボルネオのポンチアナに蘭芳大総制共和国(一七七五—一八八四)を創立せしめた蘭芳公司大唐総長の「羅芳伯」(一七三八—一八二二)は、梅県石扇堡出身の嘉慶州客家であった。<sup>(5)</sup>同郷百余名を擁してオランダ勢力に対抗、自治王国を一世紀間余にわたって持続せしめ、ダイヤモンド・砂金採取のほか農林業、商業の振興にもつとめた。マレーシアのクアラルンプールで同族勢力を背景に錫鉱業開発のための自治王国を成立せしめた甲必丹「葉德来」(俗称、葉亜来、一八三七—一八八五)は恵陽縣淡水鎮週田郷出身の惠州客家であった。<sup>(6)</sup>時を同じくして、隣接のペラ州で進行していた錫鉱区をめぐる義興と海山両公司の械斗における海山の首領の「鄭景貴」も客家であった。<sup>(7)</sup>本国では「山多田少」の恵まれない自然環境から、太平天国の乱(一八五〇—一八六四)をひきおこした洪秀全(広州府花県人、先代嘉應州石境郷人、一八九九—一八六四)と、その副將馮雲山も客家であって、上帝会と呼称する秘密結社を組織していた。洪秀全が採用した重要な経済政策は、田を九等に分つて土地均分を意図する天朝田畝制度(太平天国癸好三年新刻)であって、客家としての立場を反映せしめていた。<sup>(8)</sup>

太平天国没落二年後に出生した孫文(広州府中山(旧名、香山)県人、一八六六—一九二五)も、客家もしくは山地の一人であって、一九〇三年秘密結社の致公堂に参加した後、改訂した新章程第二条には洪秀全の天朝田畝制度をうけついで地権平均の政策を主要革命目標としてかかげ、その後三民主義の民生主義でも「耕者有其田」のスローガンを明らかにしていた。

洪秀全や孫文が主要革命目標としてあげた土地改革思想は「山地」ともいわれた客家の環境に育てられた必至

タイ国における華僑社会の構造

の要請でもあった。その後、それは毛沢東の農業革命方式にとりいれられ、中華人民共和国一九五四年憲法第八条には、農民の土地所有権すらが認められ、孫文の「耕者有其田」の思想が生かされていた。この毛沢東の農業革命方式をもってモスコ・オリジンとする見解もみられるが、如上の経過からして中国オリジンと理解する方が当然の帰結といえよう。

海外のマレーシアにおける中国人を主体とする「マラヤ共產党」は完全に毛沢東路線を踏襲している。その総書記の陳平<sup>(もんぺん)</sup>（在任、一九四七—現在）も客家の出身である。毛沢東が瑞金に江西ソビエト政府を組織したのは一九三一年一月七日であったが、それより先中国におけるソビエトの嚆矢は惠州客家の彭湃<sup>(ほうはい)</sup>（広東省惠州海豐縣東社人）が一九二七年一月一七日に樹立した海陸豐ソビエト政府で、翌年の三月まで約四カ月にわたって存続をみていた。<sup>(10)</sup>

惠州客家には、孫文と会党としての興中会を結成した鄭士良<sup>(ていしりやう)</sup>（字弼臣、惠陽縣人、一九〇一没）があり、一九〇〇年の惠州の役では、日本人の平山周、山田良らの参加すらみていた。<sup>(11)</sup> 同じく惠州客家の廖仲凱<sup>(りやうちうがい)</sup>（惠州惠陽縣鴨鴨仔歩人、一八七六—一九二五、中国同盟会創設、国民党員、広東省長、国民政府財政部長等）と、その夫人何香凝<sup>(かかうけい)</sup>（広東省南海縣人、中央人民政府委員、北京在住）との子の廖承志<sup>(りやうせいち)</sup>（一九〇八—中国アジア・アフリカ團結委員会主席、中日友好協会会長）は、L・T・貿易覚え書の署名者として著名である。

さらに、中華人民共和国政府要人として最近大きく登場してきた葉劍英<sup>(えけん)</sup>（一九〇三—広東省梅縣人、中央政治局委員、国防委員会副主席）は嘉應州客家である。海外の東南アジアで経済進歩のもっとも目覚ましいシンガポールの人民行動党内閣の李光耀<sup>(りこうごう)</sup>首相（一九二三—ケンブリッジ大学卒業）は大埔客家であり、首相就任後すでに一八年



におよんでいる。

以上のほか、黄花崗七十二烈士のうち、三四名までが客家であるとか、張、發奎（始興人、第四軍長）、陳炯明（海豐人、広東省長）、陳公博（惠州人、国民政府実業部長）、陳銘松（廉県人、十九路軍統率者）、鄒魯（大埔人、西山派巨頭、中山大学長）等の幾多の客家系の政治家、軍人の逸材を列記することができる。<sup>(13)</sup>

政治的、軍事的方面以外に、客家の経済的方面への進出に関しては、張弼士（字振勲、広東大埔県黄塘郷人、一八四〇—一九一六、インドネシア、マレーシアでのゴム・椰子・茶・コーヒー等の農園栽培、錫鉱業・本国の広州・惠州・仏山・雷州・烟台各地に織布・醸造・ガラス器等の工場設置、大清銀行、仏山鉄道の経営、ペナン領事・シンガポール総領事歴任<sup>(14)</sup>）や、胡文虎（福建永定県金豊里忠川郷人、一八七一—一九五四、永安堂国薬行、星洲日報・総滙報・星中日報・星報・星島日報・星暹日報等一〇余の新聞経営、学校・病院・養老院等の社会施設経営）が目立った存在である。<sup>(15)</sup> 経済人といっても、この両者とも政治的・社会的活動が併行しており、客家の任侠的特性をはっきりと反映せしめている。客家が多少の蔑視をうけながらも、優秀な人種集団であることについては、ハンティントン説を肯定しうるであろう。

ただ、客家の姓氏的結集力が異常に強固であり、郷土の村落間で排他的なばげしい械斗が展開され、太平天国の乱と併行して広東省の西部では、一八五四年から一八六七年にかけて本地と客家の間に「仇客分声」の西路事件が展開され、さらに海外のマレーシアでは、一八六二—一八七四年間に客家の海山公司と四邑の義興公司の錫鉱区をめぐる械斗は、イギリス側の軍事的干渉みるにいたらしめた。<sup>(16)</sup> 旧金山のカリフォルニアでも、一八五四年トゥルムン地区の金鉱区をめぐる三邑幫と客家幫の械斗があった。

客家は克苦耐勞、勤勉節約のごとき徳目をもっているが、他方本地や土着と容易に同化することなく、大族集居<sup>(17)</sup>して排他性をつよめ、極度の儉約となり、利己主義に墮しやすい面もみられることは、ハンティントンもこれを認め、また主として西路事件を取扱った「赤溪県志卷八附編、赤溪開県事紀」にも、その間の事情が明らかにされている<sup>(18)</sup>。たとえば「客民の方音すでに別あり、また皆堅忍耐勞にして、とみに独立の性質あるに因って、習うところ土着と同化せず、ここにおいて扞格、彼此或いは猜嫌を起こすことなきにあらず」とあって、土客が方言と習俗の相違から対立し、相互嫌悪の感情の生じたことを明らかにしているが、今日ではこのような対立感情も漸次後退してきている。その一例としては、西路事件の終末とともに同治六年（一八六七）客家専住の地として新寧（現在名、台山）県の南部に赤溪<sup>（19）</sup>、（民国政元後は赤溪県）が創設されたが、今日では赤溪県客家の組織する赤溪会馆＝Chu Kai Fui Kon は、隣接する台山県・開平県・恩平県・鶴山県・新会県の諸会馆を組織する「本地」とともに連合して、マレイシアでは一九五三年「馬來亞古岡州六邑總會」を設立している<sup>(19)</sup>。土客械斗はもはや過去の史実となつてしまつたといえよう。

### 三 泰国華僑客属総会の成立

客家集団のタイ国への進出については、その南遷の第五期の明末清初以降とみられるが、十分の史料はない。鄭信<sup>（20）</sup>のトンブリ王朝（一七六七―一七八二）になって、客属がバンコックの対岸のトンブリに、「三奶夫人廟」を建てたことが明らかにされている。客家の海外進出の促進されたのは、本国で咸豊・同治年間（一八五二―一八六七）の太平天国の乱（一八五〇―一八六四）と西路事件（一八五四―一八六七）で、客家が大きな打撃をうけた時期以

降であった。バンコック側に客家が「漢王廟」、「本頭公廟」、「関帝廟」、「観音廟」等を建てたのも同年間であった。まだ、宗教信仰の対象であって、客家自体の団体組織としてではなかった。

太平天国の乱以降反清復明のスローガンのもとに、各地に秘密結社が組織化されはじめ、タイ国でも同治初年（一八六二）に、バンコックの三王府に嘉応州梅県人の李家仁と伍福二によって「集賢館」が設立された<sup>(20)</sup>。

義気を重んじ、規則厳格で、秘密結社の風、すなわち組織への加入に際しては、秘密結社の結盟方式によって、「斬鶏頭」を行って宣誓手続とした。客家の入会するもの少くなかった。<sup>(21)</sup>その後一〇年余をへて、意見の分歧から、秘密結社としての「群英公司」と「明順公司」の二集団に分裂し、前者はサンペン街の観音亭巷に、後者は今日の客属総商会のあるバドサイ路に根拠をおき、相互に私斗の風気が盛んであった。両派の対立抗争は客属全体の共同福利を謀かるにいたらなかった。

華僑社会では共同墓地の設置が先決問題であったから、光緒十五年（一八八九）伍森源（嘉応州梅県松口人、広源隆号、森林木材業経営）を主事として、シロム路に約五レイの土地を購入して、「客属義山」が完成した。<sup>(22)</sup>光緒二十五年（一八九九）には、張炳坤が本国から道教神の呂帝像を持ちかえり、伍氏の広源隆号内に安置し、後の力察旺路の「呂帝廟」となった。客属の最大の廟宇であり、かつ唯一の道教廟宇となっている。

清末宣統二年（一九一〇）におよんで伍森源と、その子伍佐南（タイ国僑生、一八七九—一九三九）、陳緝堂（梅県白土郷人、一八五八—一九五〇）ほか侯芳利らとともに、明順・羣英二派の徒らに死傷を重ねる私斗の解消を勧告して両派を合併し「暹羅客属会所」を「呂帝廟」に開設した。<sup>(23)</sup>華僑団体萌芽期ともいべき公司（秘密結社）時期を離脱して会所の成立をみた。

#### タイ国における華僑社会の構造

最初の会長は楊香秀、副会長は伍佐南であった。会所は成立しても、なお明順・羣英の私派の關係が残存し、神廟・義山も会所の統一管理におくことができなかった。民国二年に進徳学校が創設され、ついでパドサイ路に三層楼を建て、一、二階は進徳学校、三階には関帝廟と「客属別墅」が設けられた。

民国十五年（一九二六）に「客属公墅」を改めて「客属總會」とし、章程を定め、翌民国十六年十二月政府に登記して、その批准をうけ、法人資格を獲得した。正会長には伍佐南が歴任して、本会の發展は軌道にのった。客属義山の地契を伍森源の名義から、本会の所有に移し、（一九二八）、買収した中華学校を尚徳と改名（一九二九）、後「進徳学校」第二校とし（一九三三）、一九三五年には進徳学校は本会の直接管理とするところとなった。羣英公司産業の本会への移管には問題はなかったが、明順所有の産業の移管は容易に解決することなく、一九三〇年におよんで、漸く訴訟の解決をみ、完全移管をみた。

一九三〇年には各神廟を政府に登録して、本会の監察保管するところとなり、その他糾紛の調解、災害の救済等に尽力し、旅タイ数十万（一九五五年度、三六万人、スキナー推計）の客家のための唯一の公共機関としての礎地が固められた。<sup>(24)</sup>

本会設立初期の一九二九年度の会員数は四〇名余にすぎなかったが、一九三八年度には一、三〇〇名余となり、一九五八年には七、〇〇〇名余に増加をみた。客家はバンコックに集中していたが、一九四五年から内地各都市にも幹事制を設け、二五都市におよんだ。同年組織の拡大をみるとともに、本会は現在名の「泰国華僑客属總會」<sup>(25)</sup>と改名した。

本会の成立については、その前身の「集賢館」を創設したのが、梅県人の李家仁と伍福二であり、暹羅客属会

所に改組したのは梅県人の伍森源とその子伍佐南等であり、伍佐南（一九二七—三三正総理、一九三—三八正会長）は客属別墅の法人組織としての基礎を固め、佐南の弟の伍東伯（一九四〇—四四正主席、一九五三—五八正理事長）、さらに佐南の子の伍柏林（一九四八、正理事長）、と伍励民（一九六九—七〇年副理事長）等、嘉応州梅県出身の伍氏三代にわたる一族の人脈が本会の発展に大きく寄与している。

本会の役員をみる場合にも、ほとんど梅県人であり、そのほかそれに隣接する潮州府の大埔県と豊順県出身客家が若干みられる程度であって、バンコックの客家帮は梅県を中心とする嘉応州（梅・五華・興寧・蕉嶺・平遠の五県）客家を主体としているものといつて差支えない。この点、マレイシアのクアラルンプールが錫鉱労働者の惠州客家の本拠であることとはきわめて対照的である。

嘉応州は東南方は潮州の大埔県、豊順県の客家居住地帯、西方は惠州の和平県・竜川県・紫金県・陸豊県の客家専住県に囲まれ、海に面しない山岳地帯であって、周辺に非客家の居住をみないで、またそれとの混住もなく、比較的客家の特性が純粋に保持されており、客家中の純血種とみられている。前述したハンティントンが客家こそ中国人のクリームであるとの説も、嘉応州客家についてであって、四面山に囲まれる「山地」が世界の山国の人達と同じく、自由を愛し、教育がゆきとどいているとの客家との共同生活体験者のスパイカー＝Mr. Spikerの記述を引用している。<sup>(26)</sup> 筆者は、バンコック華僑社会の指導者層、ないしは主要メンバーについて、客家帮に関する文献資料を検討しつくしてみたが、重労働者移民としての特性をもつ惠州客家の代表は一名だにみいだしえなかった。

以下、惠州客家とは相違して、比較的に都市商業移民としての色彩のつよい嘉応州客家を主体とするバンコッ

クにおける客家帮社会の特性を明らかにしたい。

#### 四 タイ国客家帮社会の構造と特性

タイ国における客家帮団体としては、前述のごとく、「泰国華僑客属総会」が嘉応州の梅県客家を中心として成立をみている。

さらに、同会に下属する客家帮団体としては、潮州韓江上流の大埔県客家の組織する「旅暹大埔公会」と、その下流域の豊順県客家の組織する「泰国豊順会館」、さらに嘉応州興寧県客家の組織する「泰国興寧会館」の三集団がある。これらの三集団は梅帮とも地理的に接近して、唇齒の關係にあり、客家の小方言、習俗、いわゆる声俗相同じで、相互に友誼關係もあつた。

客語の方言には、「海陸」と「四県」があるといわれ、前者は惠州の海豊・陸豊の方言であり、後者は嘉応州の五華・蕉嶺・平遠・興寧の四県（事実上は梅県をふくめて五県）の方言であつて、同じく客語であつても両者に若干の相違がみられる。<sup>(27)</sup> シンガポールでは、福建省境の近接する永定県客家をふくめて、「豊永大公司」を組織して墓地を共同管理している。さらに、この豊永大公司是嘉応系と連合して、「嘉応豊永大連合董事会」を組織して、福德祠、大伯公廟の共同管理をしている。他方、惠州客家は嘉応州客家よりも、むしろ広州府・肇慶府系の「本地」と連合して、シンガポールでは「広恵肇会館」が組織されている。

バンコックでは、永定県客家の集団がなく、「豊永大」の成立をみていないが、地理的に接近し声俗を同じくする嘉応・豊・大で客家帮社会が構成されている。

客属総会の下部に前述のごとく豊順と大埔の同郷団体があるが、嘉應客家のそれはない。そのことは客属総会の役員をみても大半が梅県客家であって、豊順と大埔はマイーリティーで、別に梅県系のみの特設集団を必要としなかったものとみられる。

今、「泰国華僑客属総会、民国五十八・九年刊」の同年度（一九六九—七〇）の役員理事総数三六名の出身県についてみるに、その識別されうるもの三一名の内訳は、次の通りである。

梅県出身理事者数（名譽監事長、名譽理事長をふくむ）	一三名
大埔県出身理事者数	三名
豊順県出身理事者数（理事長をふくむ）	二名
興寧県出身理事者数	二名
福建省平和県出身者数	一名
計	三一名

右のとおり、客属総会役員の大半が梅県出身者で固められている。

また、豊順県は混住県であるが、「泰国豊順会館」の理事長以下の役員のほとんど全部が客家で、潮州系と識別しうるものは、監事長一名程度にしかすぎない。この点、本会館は混住県出身者団体であっても、客家集団とみなして差支えない。

大埔県客家の組織する「旅暹大埔公会」は純客県集団である。スキンナーはタイ国における客家人口総数を三七〇、〇〇〇人（一九五五年度）と推計して、潮州系について第二位を占めるとしている。<sup>(28)</sup>潮州系人口のバンコッ

#### タイ国における華僑社会の構造

クへの都市集中型とは相違して、客家系はバンコックのほか、北部・南部方面への分散型人口となっている。

「泰国華僑客属総会」の会員総数は、九、七五四名（一九六七年度）、「旅暹大埔公会」のそれは、一、二二六名（一九六八年度）、「泰国豊順会館」のそれは、二一、六九〇名（一九六七年度）である。右の客属総会の九、七五四名のうち、中央のバンコック・トンブリ・ペイトリユウ三府の会員数は、三、九二九名で総数の四〇・三％で、その他の大半は各地に分散している。<sup>(29)</sup> 大埔公会の会員総数一、二二六名のうち、中央のバンコック・トンブリ・ペイトリユウに居住するもの六二九名、その他の五八七名はチェンマイ・ソンカイ以下の内地会員である。<sup>(30)</sup> 豊順会館の場合は、会員総数二、六九〇名のうち、バンコック在住のもの一、八〇九名で過半数を占め、トンブリのそれは一一五名、ソンカイ一三九名、チェンライ七八名、ペトリユウ五六名等その他南北各地に少数ずつ分散をみている。<sup>(31)</sup>

客家集団の特徴は女子会員の少くないことであり、客属総会の中央三府の永遠会員数一、四八〇名（一九六八年度）のうち、女子会員は二二二名で一五パーセントに相当し、大埔公会の会員総数一、二二六名のうち女子会員数は一〇一名で、その八・三パーセントに相当する。豊順会館については、会員の男女別は不明である。

如上、女子会員数の比率は他の各帮のそれと比較する場合きわめて高い。例えば、日本の華僑社会では、バンコックのごとく客家帮や、潮州帮の進出をみることなく、他の広府・福建・三江 北帮の進出をみていたが、その場合女子会員はほとんどみだしえなかった。<sup>(32)</sup>

大姓の進出に次に、華僑社会には、大族南遷の傾向がつよく、客家帮もその例外ではない。本国の郷土地方に大姓集居の傾向が支配するのみならず、出先国でもそれが踏襲されている。



今、その例示として、客属総会のバンコック・トンブリ・ペイトリユウ三府の永遠会員と基本会員にのみついて、姓氏別に第一位から第一〇位までをひらうと次のような結果がえられる。

永遠会員

基本会員

(1)	陳	一二三名	陳	二五六名
(2)	黃	一〇六名	黃	一九一名
(2)	劉	一〇四名	劉	一五五名
(4)	李	一〇〇名	李	一五二名
(5)	張	九六名	張	一四四名
(6)	徐	七〇名	羅	九八名
(7)	羅	五二名	鐘	八二名
(8)	鐘	四七名	曾	七〇名
(9)	侯	四三名	廖	六六名
(10)	余	四三名	林	五七名
(11)	丘	四三名		

右は客属総会の会員総数九、七五四名のうち、中央三府居住の会員数三、九二九名から抽出した結果である。<sup>(33)</sup>

右によれば、永遠・基本会員の第五位までは、共通した順位で同姓がつづいている。第六位以下は若干順位が相違し、異姓があらわれる。

何れにもせよ、基本会員第八位の曾姓、第九位の廖姓以外の各姓については、それぞれの姓氏団体が「宗親総

タイ国における華僑社会の構造

会」と呼称してバンコックに成立をみている。今、それを列記すれば次の通りである。

- (1) 泰国陳氏宗親總會
- (2) 泰国黃氏宗親總會
- (3) 泰国劉氏宗親總會
- (4) 泰国李氏宗親總會
- (5) 泰国竜岡親義(劉・関・張・趙の四姓)總會
- (6) 旅泰徐氏宗親總會
- (7) 泰国羅氏宗親總會
- (8) 泰国鐘氏宗親總會
- (9) 侯氏宗親總會
- (10) 余氏宗親總會
- (11) 泰国丘氏宗親總會
- (12) 泰国林氏宗親總會

なお、バンコックには以上のものをふくめて総計四一の「宗親總會」がある。

バンコックにおける華僑社会の指導者達は、上位団体の「中華總商会」から、「七属」の各自の会館、下部の県別の「同郷会」のほかに、それぞれの姓氏団体、すなわち「宗親總會」の役員として参加する。各自の経済活動以外に、これらの機関を通じて社会的、時としては政治的な面までの機能を果し、自治的、ないしは自衛的な体制を展開し、伝統と慣行の支配する集団社会＝collective societyとしての実体が堅固に構築されてゆく。

右の場合の「宗親会」は、本国郷土社会の延長とみなして差支えない。例せば、純客県の潮州府大埔県には「民国二十七年版大埔県志」によれば、八区五五郷に分かれているが、大姓ほど多くの各区の郷村にひろがっている。客属総会会員名録の最大姓である「陳」姓についてみると、八区一〇二村にわたって居住している。第2位の「黄」姓は七区一三九村、第3位の「劉」姓は八区九五村、第4位の「李」姓は八区一〇八村、第5位の「張」姓は八区一七三村にわたって居住して、小姓の「翁」姓は一区一村、「丁」姓は二区四村、「袁」姓は四区四村、「彭」姓は二区九村のごとくその居住範囲はせまい。<sup>(34)</sup>村落相互間の械斗における大姓支配はいうまでもなく、同様の傾向は出先の社会にまで延長される。だが、今日ではかつての客家と本地との間の械斗の風習も後退し、宗親会も家族間の冠婚葬祭礼を厚くし、守望相助の相互扶助団体の地位を守旧する機能を果たすにとどまっている。だが、宗親会はバンコック華僑社会の一股体として確固とした存在を示している。宗親会の上位に県別同郷会があり、その上位に七属の省別・州別・人種別の「会館」があり、さらに最上位に「泰国中華総商会」の成立をみている。

華僑社会の指導者達が各団体へのインターロッキングによって、華僑社会固有の有機組織化が成立してゆく。客属総会から上位の中華総商会へは、理事長以下七名が総商会の会董として参加している。出身地別には、梅県三名、豊順県二名、福建客家二名であり、梅県出身の副理事長は、総商会の副主席でもある。

次に、客属総会への下位の同郷団体からの役員参加は、<sup>(35)</sup>総計三六名で、内訳は梅県二〇名、興寧県一名、大埔県三名、豊順県二名、不明一二名となっている。前述のごとく、嘉応州の梅県客家が支配的であり、ことに総会の創立者の梅県客家の伍森源の系統が大きな役割を果している。現在の副理事長はその三世代目の伍励民であ

#### タイ国における華僑社会の構造

る。理事長は豊順県客家の丘氏であり、総商会の常務会董、丘氏宗親総会理事長、僑團連歡社董事長、天華医院董事を兼任している。このような兼任制はすべての指導者達に共通するところであって、自然的な血縁・地縁の人的結合関係の上に成立する諸団体から離れての抽象的個人の存在は、華僑社会では夢想だにしないところである。対外的の各団体の役員を兼任する以外に、対内的に山莊・義山（墓地）、各神廟の管理、人寿組（ギルド的生命保険）、学校の校務、医院の運営、救災工作等に関連する委員としても、有力出力・有銭出銭の原則によって奉仕していかねばならない。

各華僑団体は政府当局に登記し認可をうけた法人ではあるが、会員から分離独立し、会員と相対立するものではなく、会員の人格によって構成され、支持されるものであり、他方会員の人格は法人の外に存在するものではなく、団体の内部に消化され、生死をともしする緊密な結合関係の成立をみている。

華僑社会の指導者層が、各華僑団体間にかくにインターロッキングされ、結合されているかの図表を作成することは、華僑社会の理解にきわめて示唆的なものがあり、さらに、如上の宗法的な家族・郷党のごとき社会的諸団体の機能分析と、経済面での同業公会をもとりあげて検討していかねばならないが、本稿では一応客家幫の序説的記述にとどめておく。

（未完）

- （1） 羅香林著「客家研究導論」民国二十二年、広東、希山書藏発行、第九四—九七頁。
- （2） Ellsworth Huntington, *The Character of Races*, New York, 1925, p. 168.
- （3） E. Huntington, op. cit., pp. 166—169.
- （4） 「泰国華僑客属総会年刊」、中華民國四十五年度、第三—四頁所載「客家的文化教育」をみよ。そこでは、嘉応州

梅県の事例が明らかにされている。梅県には七、八百の村落、したがって七、八百の祖先祭祀の祠堂と七、八百の小学校があり、中学校は一〇校を算し、欧米と比較しても何ら遜色がないとされている。

(5) 羅香林著、「羅芳伯建寧羅洲坤甸蘭芳大總制考」、長沙、中華民國三十年出版。

(6) 「吉隆坡仙四師爺宮創廟史略」、クアラルンプール中華民國四十八年出版、本冊には「雪蘭莪甲必丹葉公德來奮戰史略」が採録されている。

葉亜来については、「南洋客属總會、第三十五—六週年記念刊」のうちに、曾鉄忱の「葉亜来打州府的故事」が、かなり詳細にわたって取扱っている。

(7) 本誌、第二一号所載、内田直作研究ノート「三藩市唐人街の社会構造」(二)、第二一〇頁。

(8) 清史資料第五輯、太平軍史料(一)、第六冊、「天朝田畝制度」をみよ。

(9) 本誌第二五号所載、内田直作前掲研究ノート、(六)、第九七頁。

(10) 波多野乾一著、「支那共產党史」、外務省資料、昭和七年十月刊行、第二三—三三頁。

(11) 謝佐之編「馬來亞僑總覽」、新嘉坡、中華民國三十八年六月出版、所載、「鄭士良先生」第一九—二〇頁。

(12) 前掲書所載、「廖仲凱先生」第二八—三〇頁。

(13) 「廣東客家民族の研究」外務省情報部、昭和七年十二月出版、第二四—七頁。

(14) 「客家」霹靂客属公会開幕紀念特刊、一九五一年出版、第五〇—五七頁。

(15) 前掲書、「客家」第五七—二頁。

(16) 本誌第二一号所載、前掲内田直作研究ノート、第二一〇—二二四頁。

(17) 客家の大族集居の実態については、「旅暹大埔公会、成立十五週年記念特刊、仏曆二五〇四年出版」には、大埔県における丁・王・丘・田・古・江・朱等計六〇におよぶ各姓氏集團の来源と、在住地について明示されている。

タイ国における華僑社会の構造

タイ国における華僑社会の構造

(同書、第四一二六頁)。

(18) E. Huntington, op. cit., p. 186. 赤溪県志卷八附編「赤溪開県事畧」第四葉。

(19) 馬來亞古岡州六邑總會特刊、一九六四年出版、第五頁。

(20) 「泰國客屬總會三十週年紀念刊」、民國四十六年出版、前文「本會會史」。

(21) 南洋客屬總會、「客屬年刊銀禧紀念号」一九五六年出版、第九頁。

(22) 泰國華僑人物誌、中華民國四十五年出版、第二八頁所載「伍森源先生伝略」。

(23) 前掲「泰國客屬總會三十週年紀念刊」前文④・⑤頁。

(24) 同右、前文、⑤頁。

(25) 同右、前文⑤・⑥頁。

(26) E. Huntington, op. cit., p. 168.

(27) 南洋客屬總會、第三十五・六週年紀念刊、一九六七年出版、A一九頁。

(28) G. W. Skinner, Chinese Society in Thailand, Ithaca, p. 212.

(29) 「泰國華僑客屬總會四十週年紀念刊」、一九六八年發行所載「泰國華僑客屬總會會員名録」による。

(30) 「旅暹大埔公會重建新館落成、成立二十一週年紀念特刊」一九六八年發行所載「本會會員名録」による。

(31) 「泰國豐順會館會刊」一九六七年發行所載「本會會員分布概況図」による。

(32) 内田直作著「東洋經濟史研究Ⅰ」千倉書房、昭和四十七年四月發行、第一章「留日華僑団体の沿革」、第二章「明治年間における華僑資本の特性」をみよ。

(33) 前掲「泰國華僑客屬總會會員名録」による。

(34) 「旅暹大埔公會成立十五週年紀念特刊」一九六一年刊行、第一一二六頁。

(35) 『泰国華僑客属総会年刊』 中華民國五十八・九年刊、図片による。

タイ国における華僑社会の構造